

# 赤道線上の風土

——新馬華人の粵謳と竹枝詞について——

高 嘉 謙  
(訳 張佳能・田村容子)



中国人は、東南アジア、つまり「南洋」を見つめ続けた。インド人、ペルシア人、アラブ人、そしてマレー人は、その地域を「貿易風下の土地」と呼んだ。季節風がインド洋を渡って、船をそちらに運んでいくからである。「南洋」という言葉も「貿易風下の土地」という言葉も、どちらも東南アジアの人々にとっては、広い海を渡っていかなければならないということ、彼ら自身が望む所に行くより、はるかに困難な旅になるという事実を、言葉の中に表現している。

——アンソニー・リード『大航海時代の東南アジア  
一四五〇—一六八〇年』<sup>1)</sup>

たとい季節の移り行きはなくとも、ちょうどそれに相応する種々の変化はこの風土の内に含まれている。いわば一時

間的な移り行き」を欠くとともに「空間的な移り行き」が存するのである。それを受容し得るものに取っては、南洋の単調さはただ季節の単調さであって、内容の単調さではない。

——和辻哲郎『風土』

民族移動と離散<sup>ディアスポラ</sup>叙事の視点から見ると、〈南来〉〔訳注 Ⅱ南に來ること。中世以降の海洋貿易の発達に伴い、中国より南にある東南アジアに渡る人が多くあらわれた〕は中国南方の域外における経済活動と労働者の移動を意味し、一つの探究に値する、文化と文学の伝播に関する地理的軌跡を象徴している。これは新馬〔新<sup>シン</sup>・マ<sup>マ</sup>〕シンガポール。馬<sup>マ</sup>・マレーシア〕の華語語系文化と文学の起源の背景で

シンガポール、ベナン、ナイロビ

あり、星洲と檳榔嶼の初期の文人共同体と文学的生産を形作ったものである。それぞれの方言を持つ離散華人によって形成された移民社会とあって、漢詩のみならず粵謳〔近世、主に中国の嶺南地区で流行した民間歌謡。文語と口語を併用し、方言や俗語も取り入れる〕と竹枝詞〔民間歌謡を元に改良した漢詩の一種で、主に男女の恋愛、風土や人情を謳う〕も創作において現地の風俗を表現する際に常用の文学様式になっていた。それらは移民自体の生活経験に関するものだけでなく、言語の異郷における遭遇、変異、発展でもあり、そして文人による移民社会と原郷への地理的思考と文化的想像を生み出している。

本稿は南洋に越境した離散華人を通じて赤道線上の風土と文化に触れ、そして彼らの竹枝詞と大東亜戦争時期の広府人〔広東語を母語とする人〕が創作した粵謳が、いかに風土を描く形式となったのかについて考えていきたい。

## 一 離散華人と南洋風土

中国の帆船貿易や朝貢外交の下での〈南洋〉は、列国志という形で中国の対外交流史の典籍において語られ、往々にして異域の香りを帯びている。書物の作者たちは基本的に地理、気候、物産に着目し、そして風俗、人種、言語、文化にいたるまでを描く。これらの記録は民族誌的な人類

学上の意義を備えており、文字で初期の南洋の風貌を残してくれたものの、その言説の内容と修辭の方法は帝国秩序の下にあり、獵奇的な視線と偏見は避けられない。

一四三〇年代、鄭和の大航海に随行した官僚の費信と馬欽によって書かれた『星槎勝覽』、『瀛涯勝覽』という二つの旅行記は、のちに我々が様々な中国人による紀行文の中に見る新加坡と馬來半島の景色を、おおよそ初歩的に描き出している。馬欽の『瀛涯勝覽』は冒頭に、すべての記録は「各人物の美醜、風俗の相違、また産物の違い、国家の制度を採集する」ためだと表明している。馬敬による序言は、「島夷（かつての南方異民族への呼称）」との距離、その国々の歴史の沿革、境界の接点、城郭の設置、並びに中華の衣服や食との違い、法律制度、風俗と産物等について、全てを備えている」と、さらにはつきりと述べている。これらの調査記録の性質を持つ創作において、作者が期待する最大の意義は、「諸外国の事情に関する要領を得たうえ、特に聖人の教化が前代より遠くまで及んだことを示す」ということである。このように国威を発揚し、中華文明が遠方まで届いたことを周知するという意図は、古代の朝貢体制の典型的な心理状態から脱却していないものの、馬欽の記載はまさに風俗に関する記載でもある。同じく鄭和の旅に随行した費信の『星槎勝覽』も、道中の異国を記録し、その風土形態を描く詩を綴っている。『瀛涯勝

『星槎勝覽』と異なり、『星槎勝覽』は各国風土の詳細な叙述に力を入れたほか、それぞれの風土を題材として詩を創作した。

満刺の村寥落とし、山孤にして草木幽たり。  
青禾田に種うるること少なく、白錫地より収むること多し。

朝至れば熱きこと暑の如く、暮来たれば涼しきこと秋に似る。

羸形 膚体に漆し、椎髻 布もて頭を纏ふ。

塩は海中の水を煮、身は柵上の楼に居る。

夷区風景は別なれば、賦詠して其の由を採る。

(マラッカ) 満刺加の村は荒れ果てて、山や草木は寂しげでひっそりとしている。畑が少なく、錫が多く掘り出されている。朝になると真夏の暑さだが、日が暮れると秋のように涼しくなる。痩せた体にウルシの樹液を塗り、植のような形の鬘を結って布を頭に巻き付けている。塩は海水を煮ていたり、騎楼に住んでいたりする。外国の風景は中国と異なるため、詩文を通じてその様子を伝える。)

これは『星槎勝覽』に記された、費信が馬六甲に滞在した時の詩文である。この明快で清朗な詩は五言古体で、竹

枝詞によく使われる七言四句の形ではないが、物の種類、氣候、人種や皮膚の色、生活習慣等を描写するという基本的な内容と精神は、実のところ風土を記録する竹枝詞そのものである。

新加坡海峡の龍牙門についても同じように、自然景観を記す際に修辭に凝らない描写を用いているが、航行や航路に関わる様々な地理的な考察も見られる。

山の峻なるは龍牙の状、中に通じて水激湍たり。

居人は擄を為すこと易く、番舶は往来すること難し。

夏に入れば常に雨多く、秋を経るも且つ寒からず。

従容として使節に陪ひ、此に到りて遊観するを得。

(険峻な山々が龍の歯のように見え、その間にある川の水が激しい。住民がたやすく人の物を掠め取り、外来の船の行き来が難しい。夏に入るといつも雨が降ってきており、秋を過ぎても寒さは感じない。ゆったりと使節に付き添って、ここで見物することができた。)

これは中国の官僚が海から見た南洋諸島であり、その処理・描写された景観は、常に知識の枠組みの下で命名・弁識される。南来の旅人が焦点を当て、その位置づけを定める風土への視線は大体このようなものである。費信が特に

強調したのは、すべての異郷見聞を記録する創作が、「一覽した後に、中国の広大さ、華夷（中華と夷狄）の区別、山水の險阻と平坦、物産の珍奇、遠方民俗の卑陋（ひろう）といったことが、遠くまで足を運ばなくてもすべて把握できる」ことである。ここではおぼろげに一つの核心的問題が見えてくる。南来は常に風土の創作と関わっているが、漢詩の世界における南洋風土とはいったいどのような概念なのか、我々はその中身をどのように考え直せばいいのか、ということである。

一九〇〇年、邱菽園の資金援助で康有為は新加坡に亡命し、上客として受け入れられた。従来、康有為の南来の意義についての検討は、孔教運動（清末民初における孔子尊崇の国教化を図る運動）や政治避難等の課題にとどまっている。だが彼の詩作の系譜について言えば、南洋にいて書かれた漢詩はトラウマとしての意味を帯びており、近代漢詩の系譜において、また馬華（マレーシア華語）漢詩の意義に関しても、特別な価値がある。康有為は邱菽園『選詩図』のために詩を詠んだことがあり、「絶妙の才華、惨緑の年」（惨緑・身なりが整ったさま。唐の張固『幽閑鼓吹』による）と邱菽園の才能を褒揚する一方、「君、夷に居るに於いて亦何ぞ陋なる、尽く翠羽（さいう）を捜して紅氍（こうきゅう）に上す」という一文でも、邱菽園が新加坡で一所懸命に取り組んできた文化教育活動に関心を示した。この詩を詠んだ者

にとつて、南洋は苦熱荒涼の地であり、苦力（くり）と労働者が集まる移民社会である。詩の風雅と創作は、その困難で窮迫した客観的環境との間には、逆説的な弁証が見られる。これはもう一つの南遷や南渡（歴史上の戦火等を避けるために南へ渡ること。それに伴い中原の文化が南へ流れていく）の正統か、それとも海外の蕃国による変風（正統でなく歪んだ風体のこと。もとは『詩経』の秩序が衰退した時代に作られた詩を指す）なのか。礼典章をいかに伝承していくかという問いについて、康有為は直ちに南洋の風土が涵養した漢詩をあげた。

華夏の文明は竹枝（たけえだ）に刺（さ）し、南洋の風物は声詩（こゑうた）を被（おほ）ふ。  
蛮花駝鳥（ばんかた）に佳処（よところ）多きも、恨むらくは通才（つうさい）の総持（そうぢ）を作（な）すの  
少なきを。

（中華文明は竹枝詞に残っていて、南洋の風物はまさにそれらの詩歌に描かれている。南蛮の花や鳥にも良いところがあるのに、残念ながらそれらをまとめられる優秀な人材が少ない。）

中原の大雅は銷亡（しょうぼう）し尽き、天南に流入して正声（せいせい）を得（う）ふ。  
試（こ）みに問（と）ふ詩騷（しせう）に何れ（いづ）れの作（さ）をか選（えら）ぶ、屈原（くわん）・家父（かふ）は最も  
芳馨（ほうけい）。

（中原の高雅な文化は滅び尽きたが、南方の地に伝わって作られた詩はまさに正統の道に従っている。）

『詩經』と『楚辭』からどの作品を選ぶかを問われると、やはり屈原と家父の書いた、国の運命を悲しむ詩歌を一番優れていると見なす。

彼は南洋の漢詩の創作が孕んだ可能性を見出した。南洋という異域の風景を竹枝詞の最も良い題材と位置づけることは、実のところ、帝国の崩壊によって文化の土台が陥没した際に、詩の伝統の解体こそ大雅の消滅にほかならないことを示唆している。詩の正統は雅楽ではなく、国風のような民間の魅力にある。国境を越えた漢詩は、南方に放逐され、民間歌謡という形で詩の質感と活力を再建した。康有為の中にある伝統的な屈原式の放逐詩学（楚の国運回復に尽力した屈原は讒言により放逐され、憂国の思いを吐露した詩文を創作したとされる）は、流寓者による漢詩創作の全体的な精神に意味づけを与えた。しかし南への離散にまつわる創作は、往々にして二重の故郷体験（double consciousness）に触れている。異郷と異文化への接触到直面したことにより、文学様式は風土をあらわし、それは二重の生活、風俗、都市、文化、さらに言語「の間」(in between)にある一つの課題となった。詩はその時生み出され、華人移民社会の歴史の現場に根を下ろし、間接的に風土の「形式」上の意義となった。南洋の風土が民間歌謡と詩歌の中いかに取り入れられ、そして形作られたかと

いうことは同時に、一九世紀末から二〇世紀前半にかけて、新馬の新聞雑誌が盛んに掲載していた竹枝詞と粵謳を考察する時の一つの重要な視点である。<sup>9)</sup>そこで呈示された、漢詩の古体とも近体とも異なる風格は、南洋の風土の孕んだ別次元の意義を示唆しているようだ。

中国の詩の伝統において、竹枝詞は民間色を帯び、歌謡の口語的、音楽的特徴を兼ね備え、七言で四句かつ自由に押韻できる形式が慣例となっており、古来それを創作する詩人は後を絶たない。時代の流れとともに、竹枝詞は風物の模写から、時事の議論や異郷の新奇な物事についての描写にいたるまで進化してきた。このことは、その文体の柔軟性と、詩が時代に合わせて形を変える臨機応変な方策を持つていることをあらわしている。一九世紀以降、詩に關わる体験は文人の越境移動によって変化し、その影響を受けた竹枝詞も、文人が異郷体験を模写する際に愛用の文体となっていた。田曉菲 (Xiaofei Tian) は一九世紀中国の旅日記を考察する時に、竹枝詞の創作にある「好奇」という要素は「風土」を理解しようとする視点であるということとを特に強調している。

しかしながら、我々が馴れ親しんでいる「風土」という言葉は、いったいいかなる概念なのだろうか。中国の典籍に戻れば、「風」の意味は自然から教化まで、段階的にいくつかの表現へと発展した。『釈名』の「風は、放なり。

気の放散するなり」と『莊子』の「大塊の噫気は、其の名を風と為す」は、空気の流れを指している。『左伝』昭公二十一年の「天子は風を省みて以て樂を作り」と『呂氏春秋』「音初」編の「是の故に其の声を聞きて其の風を知り、其の風を察して其の志を知り」は、「風」の意味を社会の流行、風習、道徳といった面へと変化させ、「風」に対する人文主義的な認識と「認知的構造」(structure of feeling)上の把握が初歩的に完成したように見える。

それに伴い、自然物理の状態に応えるように、人文意義上の「風」も必然的に「水土」という概念に及んだ。そのため、『漢書』「地理志下」には「凡そ民五常の性を函み、而して其の剛柔緩急、音声同じからず、水土の風氣に繋がる、故にこれを風と謂う」とある。その言わんとするところは、水土は民族性の育成に滋養をつけ、風の形成も水土と関わり、切り離すことができない、ということだ。そうして生まれた「土氣」や「土風」等の言葉は、自然環境と風俗習慣が結合された意味を物語っている。馴染みのある「風土」という言葉も、地理と人文の二重の意味を兼ね備えている。その二重の意味を最も具体的に示しているのは、民間の声と風貌を採集した『詩経』「国風」の根底にある思想である。学者たちはさらに、各地の風土、習俗および時事を詠む竹枝詞、雑詠、棹歌、柳枝詞といった類いの文学様式を「風土詩」という呼称で概括している。

伝統の医療知識システムにおいて、「風なる者は、百病の始なり」(『素問』「生氣通天論」)は、身体意識に言及した。漢代において「風」は、時間秩序の意義、季節の移り行きへの支配、および人間の社会生活、行動基準といった意味を兼ね備えていた。伝統的な中国医学の理論にあらわされた身体と、風に導かれた時間の秩序は、一つの(身体)に繋がって働く文脈を導き出した。風は、生命に深く関わっているのだ。

他方、国境を越えた異郷での風土創作に関して、「風」という概念には、季節風に牽引された海上の旅や移動、および「風下の地」と呼ばれる赤道の自然地理環境に次いで、さらなる弁証的な意味も見えてくる。和辻哲郎の『風土』では、自然はただの風力、温度や湿度ではなく、人と相互に関わり合う感覚的類型や構造であることが特に強調されており、これも風土は一つの自己発見の仕組みであることを意味している。和辻の述べる「我々は風土において我々自身を見」とは、南洋の風土類型の背後にある、民族や人種が環境に適應するように形作られた一つの社会の具体的実践であるということを示唆している。我々が解読しようとする南洋の竹枝詞と粵謳の中では、中国の南来文人はどのような態度と視点でこの風土の「物像」(image)または「物象」(object)に介入し、それらを理解しようとしていたのだろうか。このような生活経験に基づいた感

覺、景観、脈動に関わる創作によって露呈された風土の背後に、文人の自己存在感はどのように示されているのだろうか。

それでは、熱帯気候の風土に形作られた服飾と冲涼（水をかぶって涼しさを求めるためのシャワー）文化を見てみよう。裸足で拖鞋（スリッパ）を履いたり、沙籠（サロン）を着たり、冲涼で酷暑を乗り切ったりする南洋人の生活は、竹枝詞に次のように描かれた。

終歳春と秋とを分かつ無く、薰蒸の暑気汗常に流る。

五陵の公子 此の地に居れば、縦然（たど）ひ冬天なるも裘を用ひず。

（二年間春と秋の分け目がなく、蒸し蒸しとした酷暑で常に汗が流れている。豪族の子でもこの地に住めば、冬になっても毛皮で作った服は要らない。）

女郎は履（びき）を着け漢は裙（くん）を穿（は）き、毎日街頭攘往（じやうぶ）たり。見慣れし司空（しこう）は意に経ず、波に随ひ流れを逐（も）ふて同に群すべし。

（女性は木履を履き男性は裙を着用し、毎日町中では往来の人が溢れている。見慣れたら何も気にすることはなく、みんなと同じような格好になって暮らせばいい。）

家家屋裏に涼房を築き、毎日房中に水を沖して涼む。

細かに肌膚（みぶ）を拭ひ清潔にして淨く、拖鞋（たらい）褰褌（たぐ）として廊（りやう）を歩む。

（どの家もみな自宅に冲涼房を築き、毎日その中で水をかぶって涼を求めている。清潔になるように体を細やかに拭い、草履を履いてパタパタと幽静な廊下から出てくる。）

ここでは、熱帯気候下の生活物象としての木履（スリッパ）、沙籠（サロン）、冲涼房（バスルーム）から、女性が木履を履き、男性が沙籠を着、そして毎日冲涼をするといった生活習慣にいたるまで、関心が示されている。南洋人が外部の単調な酷暑環境に適應することによって起きた変化は、日常生活における身体的律動と見なすことができる。そして竹枝詞に取り入れられ、南来者という異郷人の視点に置かれた結果、「見慣司空」（見慣れると不思議と思わない）と「随波逐流」（世の大勢の流れに乗って従う）は、二種類の異郷に習熟した生活体験となった。南洋の風貌に対する様々な描写は、「風」土の下で旅人が異郷に溶け込むために、竹枝詩の中で組み合わせたり、探し求めたりするリズムのようなものではないだろうか。

一九五〇年代、南来文人の蕭遙天が「食風与冲涼（3）」という散文で「好風有価」（好い風に価有り）、「南洋人は風を食事と同じように重視している」と強調したことは、すで

にその異郷の存在を具体的に示している。彼が書齋を「食風樓」と命名し、意図的に「洋樓」に含まれた二重の意味を顕在化させたことも、華洋雑居の社会的欲望をあらわしている。この「食風」は、風俗と風物に基づいた生存に対する一つの認知を引き出したものである。注目に値するのは、竹枝詞であれ散文であれ、そもそも南来文人が〈華語語彙〉でこのような生活様式を再現しようとする時、すでに越境する漢語の実践となつてのことだ。人間という主体を離れば言語は成り立たず、自分の考えを述べることも、コミュニケーションも社交もできない。そのため「風」は、一つの身体 of 存在感と経験、そして主体位置の確立と推移となつてゐる。特に南洋の文脈に入ると、「風」が牽引した〈華／夷想像〉とは、内と外が互いに顔を見合わせ、眺め合うことを意味している。

「Sinophone」(サイノフォン。華語圏、華語話者)の訳語について、王徳威(David Wang)教授は従来の「華語語系」をより文学的表現力のある「華夷風」(16)に変更するよう提唱してきた。そして王徳威教授はさらに、「Sinophone」(風)は常に華語が〈非華／夷〉の間で往復する声納、風向、風潮、風物、風勢であると論述した(16)。これはまろしく「Sinophone」に内包された思考に対応しており、「phone(声音)」の華語語系の文化実践における重要性を言明した。移民コミュニティの声音表現から見ると、言語

の混淆、表現様式の相違、コミュニケーション／社交の権力と資本、言語政策の実施と制定、その背後に強調された一体感とアイデンティティは、あらゆる点で「声音の政治」と関わってくる。史書美(shu-mei shih)、石静遠(Jing Tsai)が主張した華語語系の論点にある核心的な一面は、華語が移民の流動と拡散によつて形成された「多音」(polyphonic)と「多字」(polyscriptic)の混在および現地化の現象であると言及したことであり、「語系」という特質を強調するものである。しかし一方で、王徳威は「華夷風」を主張し、「華語語系の「風」は中原と海外、原郷と異郷の間を揺れ動く」と述べている。これは、我々の「華夷風景」に対する想像の可能性である。王徳威の論説は、明らかに文学と歴史の想像により近づいており、様々な越境する風土を適切に描き出している。

印尼群島と新加坡に流寓していた蕭雅堂が一八九三年に発表した「新嘉坡竹枝詞二首」は、確認できる最初の現地題材の竹枝詞と見なされている。

揺錢樹子の一枝枝、駄舌方言は恰も詞を費やす。  
安くんぞ花の開きて能く語を解し、夜来笑ひを含みて相思を話すを得ん。

(揺らすと銭が落ちてくる木の枝のように妓女が多くいるが、意味のわからない外国語や方言を喋る人との

交流は大変だった。私の言葉を解ってくれて、夜になつたら笑いながらお互いの思いを話せる女性がいて(ほしい。)

碧玉瓜破し人已に去り、瓣香もて哀しみ奠り復た麻を披る。

郎は今既に死し儂は焉をか守らん、此れより身は薄命の花に同じ。

(碧玉玉のように美しい娘を破瓜させたあの人が世を去ったので、香木を焚いて哀しみ悼み、白い麻の喪服を着ている。あなたはいますすでに死んでしまい、わたしが守ることは何も無い。これから薄命な花と同じように悲しい運命を迎えるのだ。)

この詩は南来の新客の、異郷の遊郭での経歴を描いている。歓楽ののち、異郷で客死し、馴染んだ遊女も再び頼み失つて落ちぶれる薄幸花となつた。興味深いのは、ここで「駄舌方言」(「駄舌・意味のわからない外国語を賤しめて言う言葉」という移民社会の妓楼における特殊な経験が顕在化されていることである。異郷で異族の妓女と向き合、言葉が通じず、身体言語が逆に唯一の交流の手段となつたが、結局は「夜来笑ひを含みて相思を話すを得ん」にいたる。詩人の趣味が反映されたこの竹枝詩は、同時に一つの多音な風土を示している。妓女であれ現地育ちの婦

人であれ、あるいは同じく南来の流離の中国人女性であれ、「駄舌方言」とは「南蛮駄舌」という伝統的な考えにとどまらず、現地語(馬來語、殖民言語(英語)、および南中国の諸方言が新馬の華人移民社会で共生していることを指している。

それゆえ、南洋風土から異郷の言語と華人の方言コミュニケーションにおける交渉と混合の形成を考察することもできる。一九世紀の末に広東で発達してきた粵謳という民間歌謡の様式は、移民の南下に伴い、二〇世紀の初頭に新馬の新聞雑誌によって推し進められる文学形式の一つとなつた。これらの粵謳は固有の粵語(「広東語」)を継承するだけではなく、現地の馬來語が混じつて南洋の特色を備えた「新馬粵謳」へと変貌した。海外漢詩の状況をより良く理解するには、言語の混淆は確かに一つの要点である。特に、早くも一八九〇年、新加坡の粵語話者たちが編纂し、出版した『馬拉語粵音訳義』という書物は、粵語で馬來語を音訳するという言語上の「翻訳」を試みた。このような言語の交雑と混用がもたらした影響が、移民社会の現実的な需要を反映しているということは想像に難くないだろう。こうした方言コミュニケーションが初期の文学を形作つた現象はほかにも見られる。例えば新馬地区では海南島からの移民による「過番歌」(「過番・南洋に渡つて生計の道を立てること」)があり、閩南、客家、福州等の異なる方言の歌

謡が普遍的に新馬で流行し、改編されたことは言うまでもない。また太平洋の彼方で、広東からの移民コミュニティが旧金山<sup>サンフランシスコ</sup>で創作した粵語の韻文と民謡風の詩を収録した『金山歌集』(The Songs of Gold Mountain)は、移民社会における庶民の想像および金山<sup>アフリカンドリーム</sup>夢を正確に描き出した。通俗を重んじるこれらの民間文芸は、方言の語彙と民間歌謡という形式を駆使して創作を行い、同じく韻文というジャンルに属する漢詩の系譜の中で、域外で共有された文脈の代表的な文体となっていた。そのため粵謳と竹枝詞は、域外における創作を促す力とも言えよう。近代の詩人がより多くの新語や外来語、複雑な新世界の概念を取り入れるために、絶えず古体詩と歌行体を調整してきたことに比べると、漢詩はすでに「多音<sup>ポリフォニー</sup>」として実践される途上にあり、その表現と形式が改良されていた。

初期の南洋移民文学において、粵謳と竹枝詞の創作が盛んに行われたことは否定できない事実である。士大夫寄りの漢詩に対して、上品で洗練された詩的言葉遣いや典故の引用は言うまでもなく、その創作を全体的に見ると、往々にして濃厚な文化的特質と想像を含んでいる。史書美は華語語系という概念を理論的に構築するにあたり、反覇権的な辺境の書写<sup>ライティング</sup>と漢人移民による植民という現象によって、中国中心主義に対する批判を展開した。だが、漢詩は恐らく最も中国的な文学ジャンルと文体である。そのたやすく

運用できる五言や七言という様式は、中華民国以降、旧漢詩に溺れた郁達夫にとつては「骸骨迷恋」(骸骨への執着)であり、郷愁に駆られるように文化の亡霊を蘇らせるものだ。ところが、清末以降、域外で創作された漢詩はまた、いかにしてこのような極めて中国的な趣のある文体で、華語語系に関する議論を取り入れたのだろう。音訳の新語を吸収して「語系」という概念にある多言語の特質を突出させた一部の漢詩を除き、実際には、多くの海外漢詩は中原で創作されたものと同じように、考察に値する「地方色」はわずかしかない。言い換えれば、漢詩には悠遠で伝統的な言語の表現様式があり、その文字と音韻の組合せから境地と風格にいたるまで、固まった文化的イメージから抜け出すことは難しい。しかし同時に、漢詩は我々が離散華人文学を再考するための最初のテキストの一つであり、離散から土着までの過程を物語る華語語系コミュニティの文化的創造でもある。漢詩、竹枝詞そして粵謳は、異なる文体で風土創作に介入したため、華語語系コミュニティの文学的創造について言えば、声音と風土は、こうして議論の展開に値する弁証的一面を持つようになった。

## 二 香港名優廖俠懷の抗日粵謳

一九三七年、日中戦争が全面的に勃発した後、抗日戦争文芸は粵謳と竹枝詞という文学様式を加え、率先して通俗化および大衆化された形により、新馬地区における救国という現実的な需要に応えた。粵謳は「解心」とも呼ばれ、一九世紀以降、広東で流行した民間の曲芸であり、南来文人の創作に伴って新馬で広がった。邱菽園は星洲において最も早い段階で粵謳に注目した文人だと考えられる。この民間を表現する様式は、邱菽園の提唱によって、二番目に多い方言話者である広府人を有する新加坡で徐々に歓迎されるようになった。<sup>20</sup>一九〇一年一月二十五日の『天南新報』で、新馬における最初の粵謳「粵謳解心」が掲載されたことは、早くから星洲の粵謳に関心を持っていた邱菽園の努力を証明している。民間文学を意識的に提唱することによって、粵謳もようやく彼が創設したメディアを通じて公の場で発表されるようになった。

一九〇二年、梁啓超が横浜で創刊した『新小説』の中に「雑歌謡」という欄があり、歌謡という形式で文体改革と啓蒙を議論するものだった。そこに掲載された粵謳は、国家の啓蒙という課題に切り込み、民間の低俗な言葉遣いも洗練されたうえ、民衆の意識を一新する効力を發揮した。

清末における粵謳の流行は、民間の形式で民衆を啓蒙する役割を担う勢いがあった。いわゆる「一省の方言が、一省の民智を開く」である。しかし、このような新しい粵謳の創作は、必ずしも邱菽園の南来の当初数年間に、最も関心を持たれ、取り入れられようとした課題とは限らない。とりわけ邱菽園が麗沢社で竹枝詞と粵謳題を集めていた頃、『新小説』はまだ創刊されていなかった。彼が粵謳を提唱し、竹枝詞を創作したことは、華人移民社会における民間文学の創作状況を映し出したほか、清末において、文学が異郷に触れることで発達した言語生態というものを間接的に引き出している。そのため、粵謳が呈した民間的な魅力は、主としてその多彩な言葉遣いと生活体験の深みにある。旧体漢詩の典雅さと安定感に比べて、粵謳は言語の現地化問題とその対策について、流寓文人の関心を喚起しようとしていた。

我々は粵謳に備わった方言と節回ふじまわしの特徴に関心を持っているが、言語の大衆化という面においても、粵謳は民族集団の受容と一体感を凝集している。華僑の抗日戦争動員という文脈に戻ると、星洲の粵語話者は、粵謳の吟詠とその豊富な語彙、また警世的な風刺を帯びた諧謔の文体を通じて、精確かつ迅速に抗日戦争の「現場」の需要に応えた。つまり、これは南洋の華僑を中国の抗日戦争の列に引き込み、共感を呼ぶ民間の文体でもある。我々はまさしく

粵謳の創作様式——方言話者による素朴な一体感と秀逸な口語遣い、辛辣で活気ある内容と直接現実の経験に触れることを通じて、南洋の華人が抗日戦争に直面する際の時代感覚を見ることが出来る。

一九三九年五月から七月にかけて、新加坡で発行された『南洋総匯新報』に、数篇の廖俠懐 (Liu Hap Wai, 1903-1952) による抗日粵謳が次々と掲載された。当紙は一九〇八年に『南洋総匯報』が改革を経て一新されたもので、二〇世紀の初頭に濃厚な保皇派色を保っており、革命の立場を主張する『中興日報』と鋭く対立していた。最も具体的に粵謳の「戦闘」的な言語表現を示したのは、『南洋総匯新報』が『中興日報』の社論を攻撃、または反論する際に多数創作された粵謳にほかならない。当紙は戦前の新馬両地で最後に粵謳を掲載した新聞というだけでなく、それまでに粵謳を最も多く掲載した新聞でもあった。廖俠懐の抗日粵謳は最後に掲載された作品であり、抗日戦争の情熱が反映された一方、諧謔的、風刺的、批判的な一面も見られる。その作品は華人社会に向かって投げかけられた、情感に満ちた戦地見聞と暴露記である。

廖俠懐の原籍は広東省の新会で、生まれは南海の西樵である。広州の靴店で見習いや、新聞を売る少年工等の仕事をしたことがあり、夜間学校に通ううちに粵劇を好むようになった。のちに新加坡の工場で労働者となり、余暇を利

用して現地の労働者劇団の演劇活動に参加した際に、新加坡に上演にきた粵劇の「小武」〔武芸に精通する、器量がよく凛とした若い男性役。京劇では「武生」という〕の名優観元亨に見出され、その才能が認められた。彼に弟子入りした後、「新蛇仔」という芸名で、プロの演劇の世界に足を踏み入れた。一九二〇年代後半、廖俠懐は広州に戻った後に、次々と梨園楽、大羅天、新景象、鈞天楽等の劇団で演出した。また広州の「日月星」と「大利年」という二劇団を統率することによって、粵劇の廖派芸術の創始者となり、「四大名丑」〔丑・滑稽な台詞や物真似を巧みに演じて人を笑わせる脇役〕の第一人者となった。

実のところ、廖俠懐の経歴もなかなか興味深い。彼は一度、新加坡の工場で働いた後、広州と香港で粵劇の名優となったが、創作した粵謳は新加坡の新聞に掲載された。それらの抗日粵謳には、彼の馴れ親しんだ南洋華人の世界が反映されている。抗日に必要な物力と人力の問題に直面している時、「退一步想」と「君你有本事」のような標題はまさにその状況を端的に指すものであった。

### 退一步想

勸僑胞努力輸財拯救難民。

退一步想、就海闊天空、將人比己未必我系真窮。錢無帶入棺材其实有用。知否哀鴻遍地宿露餐風！你睇天人

交逼系咁災情重、重有難民衣食無虧唔受苦痛！ 咁就要  
尽力維持積嚇陰功。見義不為、就系真無勇。宜自訟、浮  
生都若夢、情願節衣縮食都要善與人間。

一步後退して考えよう

努めて寄付し難民を救うよう華僑諸君にお勧めする。

一步後退して考えよう。他人と比べて自分は必ずしも貧乏ではないことに気づいたら、気持ちが悪くなるだろう。お金は色々役に立つので、墓場まで持つていくと勿体無い。知らないのか、民衆が苦しんでいることを！ 見よ、天災と人災に一齐に迫られるいま、生活に保障のある難民は苦痛を免れるのだ！ これでは力を尽くしてこの状況を維持し、陰徳を積まないといけないだろう。義を見てせざるは、勇なきなり。自省せよ、人生は夢の如し、節約して世を助けるほうがいい。

(一九三九年六月十九日、二四二頁)

君你有本事

君你有本事、不若返去唐山、唐山世界有咁艱難。投筆從戎、我話勝過異鄉長嗟歎、因為政府正在招羅賢士去保護江山、為國宣勞至得人稱讚。倘与草木同腐未免太平凡。若果無意還鄉要把実業弁、後方生産亦共救國有關。飽食終日容易大食懶、一盤散沙咁散、悔時悔晚重怕水剩山殘。

君に能力があるなら

君に能力があるなら、唐山〔華僑（とりわけ粵語、閩南語話者）の中国に対する呼称〕に帰ったらどうだろう。唐山の世界にはこんな苦勞がないのだから。私の考えでは、異郷で溜息ばかりをつくより、筆を捨てて従軍するほうがずっといい。政府はいま有能な人士を招いて、国土を守ろうとしているので、国のために尽力すると人々に大いに褒められるからだ。草木と共に腐っていくのでは、あまりにも凡庸すぎる。もし帰郷して実業に参入する気がなければ、銃後の生産もまた救国の役に立つ。終日飽食すると怠けるようになりやすく、散らばった砂のように退廃的な日々を過ごすうちに、国が川だけ余り、山だけ残るような情況になつてしまい、その時に後悔しても遅いのだ。

(一九三九年六月二十一日、二四二頁)

「退一步想」は人に「積嚇陰功」（陰徳を積む）よう勧めるほか、「浮生都若夢」（人生は夢の如し）と慰めることも忘れず、さらに華僑の「情願節衣縮食都要善與人間」（節約して世を助ける）ことをも褒めている。言葉遣いがわかりやすく、生き生きとしており、吟詠のうちに、華人移民社会で培われた性格と習慣に対する作者の熟知が読み取れる。一方、「君你有本事」は挑発的な意図を帯びており、

「君你有本事、不若返去唐山」（君に能力があるなら、唐山に帰ろう）と、華僑に北に帰って従軍するよう激励すると同時に、実業に資金投入するよう喚起することも忘れていない。しかし、その激励の根本には、華人移民社会の「一盤散沙咁散」（散らばった砂のよう）な特徴を看破していることがある。そのため、営みのためにお金を稼ぐことに慣れた華人に、民族共同体という想像を注ぎ込んだ。「残山剩水」（川だけ余り、山だけ残る）という亡国の光景は、口語の動詞「悔」（悔む）、「剩」（余る）、「残」（残る）として再現され、率直かつ単刀直入に戦火の実情に目を向けている。

一九三九年、戦争が拡大する趨勢の下、南洋の形勢の変化に留意していた廖俠懐は、イギリス軍の総帥が星洲に来ることに相当な期待を持っていた。以下の文章を見てみよう。

### 東風有力

英軍駐馬來総帥抵星後。

東風有力、花事頼你扶持、莫使摧花人仔折剩残枝。因謂綠瘦紅肥正愁秋又至、恐怕護花無日咯正在皺住双眉、得你此来自是偷歡喜、花叢呢陣一定有生機、怕乜佢蕭索秋風帶住的嚴肅氣、咁就花欄築起唔駛葬在春泥。東風你又切莫好似往年霎眼隨春去、就算一年四季可否好似今日

咁依依、更莫使綠葉成陰子滿枝。人人都向你指意、指意你東皇有力保得花好到長期！

東風が力を持っている

マレー駐在イギリス軍総帥がシンガポールに到着後。

東風が力を持っているから、花を守ることはあなたに頼もう。花を損なう人に手折られ、枝しか残らないようなことにはしないでくれ。葉が少なく、花が多く咲いているが、また秋が来ることに悩み、もうじき花を守ることができなくなると頭を抱えていたところ、あなたが来たのでひそかに喜んでいる。今頃花たちはきつと生き生きとしているから、あの寂しげな秋風に伴う物々しい雰囲気も怖くない。それでは柵を立てよう、雪解けの春泥に堕ちる心配がないからだ。しかし東風よ、あなたはくれぐれも、過去のように瞬間に春とともに去り行くことをしないでくれ。一年には四季があり、かなり長いけれど、いつも今のように側にいてくれないか。緑葉が盛んになり、枝に多くの実がつくことがないようお願いしたい（原文「綠葉成陰子滿枝」は、晩唐の詩人杜牧『歎花』の名句をそのまま用いている）。人々はあなたに心から期待している。春の神のあなたが力を持って花を末永く守っていくことを、心から期待しているのだ！

（一九三九年八月十六日、二五〇頁）

「東風有力」は「東風は力無く百花残う」〔晩唐の詩人李商隱の『無題』による。その書き出しは「相見時難別亦難、東風無力百花残」である〕の典故を借用し、花に喩えている。花たちの生への望みは、イギリス軍総帥の駐留に左右されており、星洲の情勢が安定すれば、当然「それでは柵を立てよう、雪解けの春泥に墮ちる心配がないからだ」となる。隠された〈落花〉という意象が全文を貫き、新馬陥落の危機を予見したかのように見える。「東風が力を持つている」ことを期待し、花と離れることなく、「花を末永く守っていくことを」願う。比喩はわかりやすく、生き生きとしている。しかし作品は諧謔の趣を持つ一方、〈落花〉という危機を隠すことはできない。この粵謳はまるで予言のようなものである。二年後、イギリス軍は日本の攻撃に迫られ、わずか十五日間で抵抗を放棄し、新加坡も占領されることとなった。

そして汪精衛の出走と和平運動も同じく、華僑の世界で容易に共感を呼ぶ抗日戦争の話題である。若き日の汪精衛は孫文に追隨して新馬で革命思想を鼓吹し、檳城出身の陳碧君と結婚したため、南洋で豊富な人脈を持つようになった。だが、一九四〇年、汪政権が南京に登場したことによって、彼は歴史に汚名を残した。廖俠懐が描いた汪の醜態は、当時の重慶国民政府の主導によって発行された、様々な汪を批判する書籍と雑誌にいくらか影響されたと考

えられる。粵謳に批判された汪精衛像を見てみよう。

唔到你頼

聞汪傀儡登場。

唔到你頼、監硬話清白無瑕、可惜你成身花債個底子已差。相好咁多真系得人怕。而家居然出局咯有案可查、咁樣子嘅女人唔愛就罷、一任佢飄萍斷梗墮落煙花。事到如今我亦無口話。世情都睇化、講乜野旧時恩愛与共当日繁華。

言い逃れはさせないぞ

汪精衛傀儡政権が登場したと聞いた。

言い逃れはさせないぞ。汚点がないと言い張っているが、残念ながら君は浮き名を流しており、そもそも信用に値しない。浮気の相手が多すぎて本当に恐ろしい。いま堂々と出局（妓女にお座敷がかかること）をした上、証拠も残っている。そんな女に対する愛情がなくなったら、いっそのまま放っておいて、妓女にまで墮落させたほうがよい。いまさら言いたいことは一つもない。世間のことすら見限ったのに、仲睦まじかったとか当時は良かったとか、昔の話を言っても無駄だ。（一九三九年七月十六日、二四六頁）

ここでは暗に汪精衛を多情な女に喩え、日本人に協力し

て政權を作ること批判した。ところが、この粵謳は同時に、汪精衛が河内で蟄居した時に重慶の党国要人に贈った「憶旧遊落葉」という詞に対して反論してもいる。詞は婉曲的に書かれており、ここでは全文を引用しよう。

林を護る心事、付して与に東流し、一たび往きて凄清なるを歎ず。

無限なる留連の意、奈せんや驚颯管けずして、青萍を催化す。

已に分かれ去潮に俱に渺たり、回汐に又重ねて経。

出水有りて根は寒く、空を拏む枝は老い、同じく漂零を訴ふ。

天心正に揺落し、算るに菊は芳り蘭は秀づるも、是れ春の栄ならず。

撼撼蕭蕭の裏、滄桑換え了はるを要めて、秋始めて声無し。

落紅に伴ひ得て帰去すれば、流水に余聲有り。

只だ目を極むるも煙蕪のみにして、寒蟬夜月は、秣陵を愁ふ。

（葉が木を守ろうとしたが、落ちてしまい、東へ流れる川とともに流れゆき、寂しい。去りがたい思いが限りなく続くが、旋風がそれにも構わず、吹き飛ばして浮き草のようにしてしまつたのは、どうしようもな

い。落ちて潮に遠くまで流されたが、上げ潮によってまた戻ってきた。木の根は水に覆われ、冷え冷えとし、かつて空をつかむ枝も元気を失い、枯れて散つたことを落葉と語り合っている。

天の心が揺れており、たとえ菊が薫り、蘭が美しく咲いても、それらは春の花ではない。さらさらと枯れた落葉は秋風に吹かれている。この世が生まれ変わらないう限り、この音は止まらない。紅い花も落ちてきて一緒に流されていくなら、せめてその流れに余香が残る。ただ遠く眺めても、霧に包まれた草ばかりで、秋の蟬と夜の月は、秣陵（南京）を哀しんでいるようだ。）

汪の原作は世の移り変わりを嘆いており、落葉を破題〔漢詩文で題目の要旨を明らかにする書き出しの部分〕とし、もの寂しい光景を描くことよって、抗日戦争の先の見通しが立たないという思いを込めている。そして彼が身を投じた和平運動は、誤解と誹謗を招いてしまい、落ちた紅い花や流れゆく川に身を寄せるしかない。自らの節操と胸襟が、理解されることを願っている。しかし、このような弁明は、むろんかつての同志たちから好意的な解説を得ることはなかった。呉稚暉が評論し唱和する際に、わざとその肝心な意象を置き換え、「恨むらくは貞堅の質の少なく、嚴霜の小さく逼るを受け、墮ちて漂萍と作る」（残念

ながら氣骨に欠け、霜に少し逼せまられると、墮ちてゆくえ定めぬ浮き草になった」と指摘している。もともと「無奈」（仕方がない）を意味する落葉は、ここでは「自甘墮落」（自墮落）の表象になっていく。「一任佢飄萍斷梗墮落煙花」（いつそそのまま放っておいて、妓女にまで墮落させたほうがよい）と、廖俠懷はよりはつきりとした表現を取った。墮落して妓女になることは、暗に汪の敵に身を寄せる行為を指している。

南洋では汪精衛のことを知らない人はいない。この粵謳の題名「唔到你類」は、汪精衛の婉曲な詞に比べ、率直で力強く、その「成身花債」（浮き名を流す）のような内情を暴いた。汪は広東出身であるため、当然粵謳が解る。本作が星洲で刊行されたことにも深い意味がある。それは汪の南洋における良好な革命イメージを覆すと同時に、華僑の抗日心理に応えたことである。当時、汪は河内に出奔しており、新馬で汪を討伐する運動が盛んに行われた。果ては陳嘉庚ケンカイキを代表格とする僑領（華僑組織の領袖とされる人たち）が、積極的に蒋介石や林森に打電し、国民党に汪を指名手配するよう要求した。汪が独自の政権を作ること、抗日に情熱を傾ける華僑がどれほど傷つけられたかがよくわかるだろう。そのため、「講乜野旧時恩愛与共当日繁華」（仲睦まじかったとか当時は良かったとか）というのは、それぞれ独自の道を歩むようになった後に、汪の裏

切りに対する哀調を帯びた非難である。南洋の読者から見れば、おのずと複雑な思いがするだろう。粵謳はまさに華僑の方言政治を促進し、もう一つの抗日実践を成し遂げたのだ。

抗日粵謳が新馬の新聞雑誌にあらわれたことは、旧式の文体が華人の民族感情を喚起し、想像させたことを顕在化するものだ。これは通俗化や大衆化された様式というのみならず、積極的に現実介入し、口語で吟詠する趣と、諧謔と共感で読者を惹きつける文体であり、戦時の見聞を筆端に上せるものである。

総合的に考えると、新馬華人の中国抗日への呼応から、新馬自身が植民地になるまでの間に、粵謳のような旧様式が再び蘇ったということは、単に救国文学の戦略的な通俗化や大衆化と考えるべきでなく、その背後には新文人の「旧様式に「奉仕」し、そして旧様式の「捕虜」になる」という憂慮がある。しかし華僑の対日抗戦への動員から、新馬が大東亜戦争に巻き込まれるまで、粵謳は生き生きとしており、その潜在的な内なる活力は、実のところ、一つの文体内部の必然的な実践と転換、すなわち（詩と史の滑動）スライドを予め示していたのである。そのため、救国に迫られた抗戦文学と歴史を記録した新馬戦時文学の文脈の下で、新馬粵謳がいかに方言で書かれた韻文を民族形式への同一感、あるいは華人共同体性質を帯びた社会的現実を描く表

現様式に効率的に発展させていったのかは、改めて考察するに値する。言い換えれば、二〇世紀前半に新馬の新聞雑誌にあらわれた粵謳は、地元の文人創作であれ、嶺南（中国南部の「五嶺」（南嶺山脈）よりも南の地方を指す）、香港や澳門からの寄稿や転載であれ、粵謳と南洋風土との弁証的關係が、まさしくある種の〈粵音風土〉を示している。それは同時に、文学と文化的意味の下にある華人コミュニティの粵語政治と見なすこともできるのだ。

〔付記〕 本稿は台湾科技部一〇六年度研究計画「知識体系与文学表述・二十世紀初的现代經驗与語言形式——粵音与新声・近代知識体系的方言書写与跨境伝承」の段階的な成果である。

## 注

- 〈1〉安東尼・瑞德『東南亞的貿易時代——一四五〇—一六八〇年』第一卷 季風吹払下的土地、北京・商務印書館、二〇一〇年、一一頁。〔訳注〕日本語訳は日本語版『大航海時代の東南アジア 一四五〇—一六八〇年』I 貿易風の下で（アンソニー・リード著、平野秀秋、田中優子訳、法政大学出版局、二〇〇二年、九頁）に従っている。
- 〈2〉和辻哲郎『風土』北京・商務印書館、二〇〇六年、二三頁。〔日本語訳は原著（和辻哲郎『風土』岩波書店、一

九七九年、三五頁）に従っている。〕

〈3〉一九世紀の中国紀行文学の異郷を表現する修辞策略に對する田曉菲の検討を参照（田曉菲『神遊』北京・生活・讀書・新知三聯書店、二〇一五年）。

〈4〉馬敬「瀛涯勝覽序」馬敬著、馮承鈞校注『瀛涯勝覽』台北・商務印書館、一九六二年、一頁。馬敬の序言にも近い表現が見られる。「将来の人に、たとえ千年が経っても、我が国の道は天地の理と一致し、蛮夷に教化を及ぼすことが、このように盛んであることを知ってもらいたい。」

〈5〉費信「滿刺加国」費信著、馮承鈞校注『星槎勝覽』台北・商務印書館、一九六二年、二〇頁。

〈6〉費信「龍牙門」『星槎勝覽』五頁。

〈7〉費信「星槎勝覽序」『星槎勝覽』一〇頁。

〈8〉康有為「題菽園孝廉『選詩函』」（『万木草唐詩集』上海・上海人民出版社、一九九六年、一一七頁）を一部引用。

〈9〉最初に南洋の竹枝詞と粵謳を検討した学術書は、李慶年『馬來亞華人旧体詩演進史』である。彼がその後に編纂した『南洋竹枝詞彙編』と『馬來亞粵謳大全』は、新聞資料の収集に力を入れ、大きな成果を収めた。李慶年『馬來亞華人旧体詩演進史』（上海・上海古籍出版社、一九九八年）、李慶年編『南洋竹枝詞彙編』（シンガポール・今古書画店、二〇一二年）、李慶年編『馬來亞粵謳大全』（シンガポール・今古書画店、二〇一二年）を参照。

〈10〉最初に「風土詩」という概念を提出したのは周作人で

ある(同氏の「関於竹枝詞」を参照)。程潔はこの言葉を踏襲し、そして「風俗」「民俗」「風土」等の語源を考証したうえで、人文に限らず地理への重視もあるため、「風土」の内包が最も幅広いと強調した。程潔『上海竹枝詞研究』上海…上海社会科学院出版社、二〇一四年、二三―二九頁。

〈11〉和辻哲郎『風土』八頁。(日本語訳は原著(和辻哲郎『風土』一五頁)に従っている)

〈12〉不磨『南洋竹枝詞』『南洋竹枝詞彙編』一一〇頁。

〈13〉蕭遙天『食風与冲涼』『食風楼隨筆』シンガポール…蕉風出版社、一九五七年、一六一―二六頁。

〈14〉「華夷風」を検討する単独の文章以外に、王徳威は胡金倫と筆者と共に『華夷風——華語語系文学読本』を主編し、「地と景」「声と象」「根と径」「史と勢」といった概念で関連テキストを解説した。王徳威『華夷風起』同氏『華夷風起——華語語系文学三論』高雄…国立中山大学学術院、二〇一五年、三六頁。

〈15〉王徳威『華夷風起』『華夷風起——華語語系文学三論』三六頁。王徳威は同時に『華夷風——華語語系文学読本』の序言において、「風」は気流の振動(風向、風勢)であり、声音、音楽、修辭(『詩経』の「国風」)であり、現象(風潮、風物、風景)であり、教化、文明(風教、風俗、風土)であり、節操、気性(風範、風格)であると、さらに論を深めた。

〈16〉史書美による華語語系文学という概念の定義は、史書

美「華語語系的概念」(『反離散』台北…聯経出版事業公司、二〇一七年、五一―二五頁)を参照。

〈17〉王徳威『華夷風——華語語系文学読本』の序言を参照せよ。

〈18〉蕭雅堂「新嘉坡竹枝詞二首」『南洋竹枝詞彙編』九頁。これが現地の初の竹枝詞であることについての検討は、李慶年の序文による解説を参照。

〈19〉「新会」馮德滋『馬拉語粵音訳義』星架波…石叻兆興隆、一八九〇年。

〈20〉麦留芳のデータ分析によると、一八九一〜一九四一年の間に広府人はペナンとシンガポールと共に二番目に多い方言話者である。最大の方言コミュニティは一貫して福建人であった。同氏『方言群認同——早期星馬華人的分類法』台北…中央研究院民族学研究所、一九八五年、七〇頁。

〈21〉『馬來亞粵謳大全』三一頁。

〈22〉李慶年「馬來亞粵謳的起源与概況」(『馬來亞粵謳大全』一一―二九頁)を参照。本稿の廖俠懐の粵謳はすべてこの本から引用したため、以下は注をつけずにページ数だけを示すことにする。

〈23〉この詞は最初に一九三九年の新聞に転載され、第二闕の末尾の句は、もとは「只極目煙蕪、寒蟬夜月、愁秣陵」だった。作者不詳「汪精衛壳国付「東流」、吳禪老填詞掃「落葉」」(『雜誌』第四卷第五期、一九三九年、二三頁)、または作者不詳「汪逆壳国付「東流」、吳老填詞掃「落葉」」

『文献』第八期、一九三九年、一五八頁）を参照。『同声月刊』に掲載されたバージョンは、個別の用字が異なるほか、末尾の句も「儘歳暮天寒、冰霜追逐千万程」となっている（『同声月刊』第一卷創刊号、一九四〇年十二月、一六頁）。汪精衛著、汪夢川注『双照楼詩詞稿』（香港：天地圖書有限公司、二〇一二年、三〇六―三〇七頁）も参照。

〔24〕 雲端「通俗化在馬來亞」方修『馬華新文学大系（一九一九―一九四二）——理論批評二集』クアラルンプール：馬來西亞大眾書局、二〇〇〇年、一一五―一一八頁。